

貿易品としての南インド産絨毯

—京都祇園祭と長浜曳山祭の絨毯をめぐって—

鎌田 由美子 (早稲田大学)

京都祇園祭では、山鉦を飾る懸装品として国内外の染織品を用いてきた。そのなかには、江戸時代に輸入されたインドとペルシアの絨毯が含まれている。1986年に、メトロポリタン美術館の梶谷宣子氏、ダニエル・ウォーカー氏、北観音山の吉田孝次郎氏、テキスタイル美術館のチャールズ・エリス氏がこれらの絨毯の調査を行い、1992年に調査報告書を出版した。その結果、懸装品として用いられてきたインド絨毯は世界的にみて類例の少ない珍しいタイプとされ、その存在が欧米のイスラーム美術史、染織史の研究者にも知られるようになった。1997年には、ダニエル・ウォーカー氏によるムガル時代のインド絨毯の研究書において、こうした祇園祭に伝わる特異なタイプのインド絨毯は「京都グループ」と名付けられ、デカン(以下南インド全域を指してこの語を用いる)産として紹介されたが、その後十分な研究がなされたとは言い難い。このタイプの絨毯はインドのどこで、いつ、どのような目的で作られたのか、類似のものは存在するのか、どのような国際交易ルートで流通したのか、という基本的な問題点を明らかにするため、日本、アメリカ、イギリス、ポルトガル、オーストリアでデカン産と思われる絨毯の調査を行い、さらに、デカンのムスリム宮廷における歴史書、ヨーロッパ人のインド旅行記、イギリスとオランダの東インド会社の資料などを調査した。

その結果、オランダ絵画に描かれているものの、特異な絨毯とされてきた「京都グループ」は17世紀後半以降にデカン地方で制作された貿易品であり、東インド会社や、私貿易商人によって世界各地に運ばれ、長浜市、イギリス、ポルトガル、オーストリア、アメリカなどにも現存することが分かり、その様式的、技法的特徴を明らかにした。デカン絨毯の生産地は、ヨーロッパ人が綿織物輸出のため商館を置いていたコロマンデルコーストに近く、輸出するのに好都合であった。デカン産絨毯は、ペルシア絨毯や北インド産の絨毯以上に、貿易品として重要性を持っていたと考えられる。オランダ東インド会社は、将軍などの支配者にペルシア絨毯を贈る一方、デカン絨毯は、主に私貿易品、役人への贈物、または注文品としてもたらされた。18世紀にはそれらが転売されて市場に出回ったらしく、京都の豪商が手にして18世紀半ばには山鉦を飾ったと考えられる。もともと日用品・貿易品として生産されたデカン絨毯は、羊がおらず、絨毯生産の伝統のない日本では貴重な舶来品として喜ばれた。絨毯は各地の社会的・文化的な背景のうえに、それぞれの地で異なる機能をもって受容された。日本向きのインド絨毯には日本人の好みも反映されており、当時の国際交易・物流に密接に結びついていたことが明らかになった。本発表は2011年1月に提出した博士論文に基づいている。